



生成AIの真価は業務システムに組み込んでこそ(株式会社エーエスピーコム 奥原代表)

2025年3月3日、IBM watsonxユーザー企業がその取り組み内容を紹介する「watsonxユーザー会」が開催されました。

今回、紹介セッションを行われた株式会社エーエスピーコム CEO代表取締役社長 奥原 啓史 氏にお時間をいただき、東京・虎ノ門Innovation Studioに常設展示されている「InfAjast(インファジャスト)」、並びにインファジャストのAI組み込み開発の中で新たに生まれたツール製品「Apex.ai(エーペックスエーアイ)」についてお話を伺いました。「業務システム本体に組み込むことで、生成AIはその真価を発揮する」と語る奥原氏の言葉を、watsonxユーザー会での発言、そしてダイジェスト版インタビュー動画と併せてぜひご覧ください。



(動画は冒頭に株式会社エーエスピーコム 営業本部 セールス・マネージャー 河合 勇樹 氏による簡単な製品紹介も含んでいます。詳細デモをご希望の方は担当IBM社員までご連絡ください。)

InfAjast(インファジャスト)とはどんな製品か。世にあまたある製品との違いは?

奥原代表：簡単に言えば、営業パーソンが使用する、顧客接点の管理システムとなります。SFAと呼ばれる営業支援システムですね。

他社SFA製品との1番の違いは、その使いやすさにあります。営業支援システムは使いこなすのが難しく「導入したものの難しくて使えない」というお客様が続出しているのが現状です。インファジャストは、忙しく外出も多いセールスパersonにも簡単に使えることと、使いやすさを追求することに徹底的にこだわっています。

また、コストパフォーマンスもよく、一般的な製品よりお安めの価格設定となっております。現在では中小企業を中心に、30000から60000名の営業パーソンを擁する大手企業様にもご利用いただいています。

法人向けIT製品比較サイトの「ITトレンド」では5年連続SFA部門で第1位をいただいております。知名度は低いものの「知ってる方は知っている」、そして導入企業が多いのがインファジャストです。

ITトレンドでの5年連続第1位は、事実上「もともと市場で評価されているSFA製品」と言っても過言ではないでしょう。

**参考 — インファジャストとは？
価格・機能・使い方を解説 — IT
トレンド**

実際、導入企業からよく届く声についてお聞きしたところ、営業パーソンからは「情報の見易さ」と「直感的な操作のしやすさ」に多くの称賛が集まっているとのこと。また、全面自社開発の強みを活かして、導入企業に適さない部分についてもしっかりと対応しているため、「他社SFAパッケージ製品にありがちな『自社に合わない』という事態が発生しないことも、管理を行うIT部門からの高い評価につながっているところです。」

なぜIBMのビルド・パートナー・プログラムに参加したのか？

奥原代表：私たちは、「生成AIといえば対話式チャットボットやFAQシステム」という既存概念をひっくり返したいという思いを持っています。なぜなら、後付けの、いわばボルトオンのような「簡易的AI」では、業務システムにおいては使用されないまま終わることが多いというのが実情だからです。

AIの重要さやその効果のほどは私がここで申し上げるまでもないでしょうし、AIチャットボットやFAQシステムの価値を否定する気は毛頭ございません。しかし、生成AIは本来もつとシステムの高度なことができるはずで、生成AIはRAGのようにプロンプトで要求を出すやり方ばかりでなく、プログラムで要求を出す方法もあります。応答処理においても同様です。もつとしっかりと業務システムそのものにAIを組み込み、業務内で生成AIが自然と使われるようになることも目指すべきではないでしょうか。

—そんな開発取り組みを検討している中で、IBMの共創スキーム「ビルド・パートナー・プログラム」のことを耳にして、その考え方やアプローチに共感し、「一緒にさせていただこう」と思った次第です。

「プログラムに参加して得たものは？」という問いに、開発スピードの大幅向上を上げられた奥原代表。

事実、インフアジャストの最新リリース版にて搭載された「写真を撮ったらあとは3クリックで名刺情報取り込み完了」というAI名刺機能は、わずか1カ月ほどで実装に至ったそうです。そしてインフアジャストのAI機能搭載スケジュールは、他にも続々と予定されています。お客様からのメールを自動判別し、送信者の感情を分析。苦情やトラブル対応依頼であれば、データベースから過去の類似トラブルを見つけ出し、メール下書きに対応方法候補を掲載。営業パーソンは内容を確認して送るだけで済むそうです。

また、お客様訪問記録や日報作成も、口頭で携帯電話に録音してシステム宛にメールを送れば、フォーマットに併せて自動入力される機能の開発も、着々と進んでいるそうです。「忙しい営業が入力してくれない…」という悩みが過去のものとなるのも近そうです。

今後どのように「AI組み込み」に取り組む予定か？

奥原代表：「より簡単にAIが組み込める「Apex・ai（エーペックスエーアイ）」という開発ツールのリリースを予定しています。

先述のインフアジャストに搭載される数多くのAI組み込み機能を技術的に切り出したもので、いわばインフアジャストから生まれ飛び出したツール製品です。

10月前後に第一版をリリースできればと開発を進めています。

このApex・aiを通じて、全世界のパッケージメーカー様やシステム開発会社様、ソリューション開発をされているSieer様と、「業務の中で使える生成AI」をお客様にご提供していきたいですね。



この日は東京では珍しい雪。ビル31階の窓から見える大粒の雪を背景に、watson.xユーザー会で講演中の奥原代表。

その他最新イベントニュースの購読はこちらをクリック

執筆：八木橋 パチ

IBM